

Green Story

第35回

(2024年度)

緑の環境プラン大賞
受賞作品集



あなたの一步が
私たちのまちを緑と笑顔の環境に!
一人ひとりの「Green Story」を
共に創りませんか!

緑の環境プラン大賞 審査委員長 進士 五十八

花と祭りは国民的趣味だといわれました。それもわが手で土を耕し花を育て、御輿を担いで楽しんだのです。

しかし万事プロが仕切る現代社会では、眺めるだけの市民生活になってしまいました。

つい先ごろ高市早苗首相も出席された「GREEN EXPO 2027」の起工式があり、横浜市瀬谷区の会場では、すでに槌音高く建設が進んでいます。新しい風景が生まれていくのを見ることのドキメキ感や達成感プロのビルダーにしか味わえないのでしょうか?

そんなことはありません。本誌『Green Story』は、「緑の環境プラン大賞」の助成金で、市民NPO、企業団体、どなたでも「緑の環境づくり」を企画し、参加者一人ひとりの「グリーン・ストーリー」を綴る絶好のチャンスを得た方々による作品の記録です。

まちをより美しくしたい。より明るく楽しいコミュニティにしたい。そんな「環境市民」が、続々大活躍です。助成金のみならず、国土交通大臣賞等を授与される「みどりの『わ』交流のつどい～都市の緑三賞表彰式～」(主催:公益社団法人都市緑化機構・一般財団法人第一生命財団、於:明治記念館)では、秋篠宮佳子内親王殿下が受賞作品を訪ね、心惹かれる素晴らしい作品であるとお言葉を述べられたこともあります。

「交流のつどい」では、渡邊光一郎第一生命財団理事長がGREEN EXPO 2027に「The Garden of Life(生命の庭)」を市民参画で出展する方針を発表されました。ぜひ、読者の皆さんも応募されてはいかがでしょうか。

緑の環境プラン大賞

「国際花と緑の博覧会」が開催された1990年に創設されました。
緑豊かな都市環境で育まれる、人と自然とのふれあいや、
コミュニティの醸成等の実現に資する
緑化プラン実現のための助成を行っています。
本賞は、地域の緑化活動の核となる「シンボル・ガーデン部門」と
地域の人々の憩いの場となる「ポケット・ガーデン部門」の
2部門で構成されています。

第35回(2024年度)緑の環境プラン大賞受賞作品



シンボル・ガーデン部門

地域のシンボリックな緑地として、人と自然が共生する都市環境の形成、地域の活性化に寄与するプランを公募し、優れた作品に1,000万円を助成します

国土交通大臣賞	社会福祉法人 檸檬会	カラフルな○△□(こせい)が見える『インクルーショナルプレイガーデン』	奈良県生駒郡三郷町	02
都市緑化機構賞	一般財団法人 和知ふるさと振興センター	わち山野草の森へのいざないー地産地消でつくる、みどりのトンネルー	京都府船井郡 京丹波町	04
第一生命賞	株式会社イー・コンザル	里に触れるまちのひとつきー江坂ひとつきプロジェクトー	大阪府吹田市	06



ポケット・ガーデン部門

日常的な花や緑の活動を通して、地域の活性化や子どもたちへの情操教育、身近な環境改善に寄与するプランを公募し、優れた作品に150万円を助成します

国土交通大臣賞	一般社団法人 市駅グリーングリーンプロジェクト	和歌山市駅前ストリートガーデン「しえきのにわ」	和歌山県和歌山市	08
第一生命財団賞	特定非営利活動法人りくカフェ	りくカフェガーデンを核とした「未来コミュニティ」の醸成	岩手県陸前高田市	10
コミュニティ大賞	たぶのきネットワーク石巻	未来への架け橋ー生命かがやく学校林ー	宮城県石巻市	12
	社会福祉法人三篠会 それいゆ保育園	まもろう! それいゆの自然! 育てよう! 麻生のわ	神奈川県川崎市	13
	坂井市国際交流協会	外国人と作るベジガーデン	福井県坂井市	14
	岐阜県立国際園芸アカデミー	緑が輪(縁側)になる庭	岐阜県可児市	15
	社会福祉法人光陽会 認定こども園光陽会しんひのおだい	開け、緑の玄関!	大阪府堺市	16
	大阪市立瓜破西小学校	アトリパークでESDーみんなが笑顔のコミュニティー	大阪府大阪市	17
	特定非営利活動法人 西日本環境ネットワーク	自然と共存・緑で地域がつながる「ころりん広場」	福岡県糸島市	18
	社会福祉法人ゆりかご会 認定こども園みどり保育園	緑と水と生命ーみんなで共生する環境をー	宮崎県北諸県郡 三股町	19

社会福祉法人檸檬会

カラフルな○△□(こせい)が見える
『インクルージョンなプレイガーデン』

奈良県生駒郡三郷町



レストランや就労継続支援施設などが入る建物の前庭に整備されたプレイガーデン「いんくるパーク」

さまざまな個性をつなぐ緑の庭

奈良学園大学の移転に伴い、奈良県生駒郡三郷町さんごうちょうに無償譲渡された旧キャンパス敷地約13万6000㎡が、2023年「FSS35キャンパス」として生まれ変わった。敷地内には、複合スポーツパークが整備された他、旧講堂や図書館などの既存施設をリノベーションし、障がい福祉施設やコワーキングスペース、教育施設、レストラン、木育体験型施設などに転用。運営には、三郷町と共に社会福祉法人檸檬会や学校法人奈良学園大学など、産官学が連携し、総合コミュニティを実現した。

同エリアは「ソーシャルインクルージョンヴィレッジプロジェクト」の一環として整備された。性別・年齢・国籍・障がいの有無などにかかわらず「誰もが学び、働

き、遊び、暮らす」場とすることを目指している。「村長」として運営を担う社会福祉法人檸檬会本部長の鈴木麻友子さんは「ここは独立した場所ではなく、まちと地続きの日常の場。誰もが訪れ、自由に過ごせるヴィレッジです」と語る。

シンボル・ガーデンとして完成した「インクルージョンなプレイガーデン」は、コンセプトを象徴する場として、敷地の中心部に整備された。多様な個性を表現した「○△□」の花壇には季節ごとの彩りを見せる花、香りや触感を楽しめるハーブ類を植栽。また傾斜地であることを活かし、子どもたちが全身を使って遊べるはしごやロープなどの木製遊具や滑り台も設置した。訪れる人々が目にし、体験できる豊かな緑化空間が、ソーシャルインクルージョンの理念を体現している。



傾斜地であることを利用して、滑り台や木製の遊具も設置



FSS35キャンパスのほぼ中央に位置し、誰もが利用できる開かれた緑地

さまざまな個性を表現する○△□をかたどった花壇

花壇の中には季節の花々と共に、香りや手触りを楽しめるハーブを植栽



FSS35キャンパス内には子どもに人気の「奈良おもちゃ美術館」や語学学校などが点在。2026年にはこども園も開園予定



遠く山並みを見晴らす景観からも、自然の豊かさや季節の移ろいが感じられる



一般財団法人和知ふるさと振興センター

わち山野草の森へのいざない
—地産地消でつくる、みどりのトンネル—

京都府船井郡京丹波町



わち山野草の森のエントランスに設けられた「みどりのトンネル」

ユニークな「みどりのトンネル」

丹波牛、丹波栗、丹波黒豆など、品質の高さで全国的な知名度をもつ農産物の産地・京丹波町。その豊かな自然を守り、育む町の姿勢を象徴するのが、約12万㎡の広さを誇る自然公園「わち山野草の森」だ。

「わち=和知」は、2005年の合併により京丹波町となる前の旧町名。旧和知町は90%以上を山林が占める林業が盛んな土地で、その副産物である山野草の栽培事業も手掛けてきた。「わち山野草の森」は訪れる人に豊かな里山環境を楽しんでもらう公園として、また山野草の販売拠点として1998年に開園。以来、愛好家を始め、四季折々の自然を楽しむ来園者、小学生の遠足やオリエンテーションの場としても活用されてきた。

そのエントランスにこの度、「みどりのトンネル」が完成した。地元産の間伐材でトンネル躯体を組み、以前から園内で栽培され、子どもたちからの人気が高い「へびウリ」を這わせるというユニークな佇まい。トンネルの足元には、絶滅危惧種に数えられるギフチョウの食草となるカンアオイ類など、生物多様性に配慮したさまざまな草花が植栽された。苗の植栽には、畠中源一町長を始め、地元の小学生らも参加したという。

「わち山野草の森には京丹波町の自然の豊かさ、恵みが凝縮されています」と畠中町長。2026年9月に開催される「第43回全国都市緑化フェア in 京都丹波」の拠点施設の一つになることもあり、「ぜひ、より多くの方々にご来園いただき、その魅力を知っていただきたいですね」と笑顔で言葉を継いだ。



地元産の間伐材を活用したトンネル。高さ約4m、延長は約13mにおよぶ



トンネル内に植栽された、ギフチョウの食草となるカンアオイ

ニョロニョロと細長い実をつける「へびウリ」はカラスウリの仲間の1年草で成長するとオレンジ色になる。「オレンジになった実から採種し、苗を育て、来年また、子どもたちと植えたいと思います」と教えてくれるのは園長の山田さん



トンネルの外側にも芝生を敷き、草花を植え、周囲の熱環境を緩和している



オミナエシやフジバカマ、キキョウなどを「秋の野原」のように植栽

今回の取材に応じてくれた、京丹波町長・畠中源一さん(中央)、一般財団法人和知ふるさと振興センター理事長・藤田義幸さん(右)、わち山野草の森園長・山田義法さん(左)



株式会社イー・コンザル

里に触れるまちのひととき ～江坂ひとときプロジェクト～

大阪府吹田市



敷地の西側の里山ゾーンに設けられたピオトープとレモンやブルーベリー、ウメなどが植えられているエディブルフォレスト

まちと里山をつなぐ交流拠点

対象地は、実施団体イー・コンザル代表取締役の榎原友樹さんの父親が所有していた土地。以前は倉庫として利用されていたが、榎原さんが引き継ぐにあたり、一般市民向けの体験型ピオトープ・交流拠点「江坂ひとときプロジェクト」として建て替えた。

当該地は、近年人口増加に伴い急速に都市化が進行。オフィスビルやマンションが多くそびえ建つエリアであるが、市民が気軽に集まり、楽しめる場所は少なかった。加えてかつてはそれなりに緑も豊かで、自然を満喫できる場所も少なかったが、昨今そうした緑の環境は減少傾向にある。「父にマンションだけは建ててくれると言われていたので、兄弟で相談して交流拠点

をつくろうということになったんです」と榎原さんは話す。ビルに囲まれた敷地に緑の空間を創出させて近隣の里山とつなぐ、そんな夢のような構想を実現させた。市民が気軽に立ち寄れるカフェを中心に、周りは緑に囲まれている。庭の一部はピオトープで、水性生物が戯れ、虫や鳥たちがやってくる。またもう一方の庭は、エディブルフォレストで、レモンやウメ、ブルーベリーなどの食用植物が植えられていて、収穫物はカフェのキッチンで料理素材に使用されるという。

「建築には通常は針葉樹が使われますが、ここではあえて広葉樹を使いました。これも里山資源の有効利用のためです」と榎原さんは楽しそうに話す。大都会の真ん中で土・木・草・花と遊ぶ。都市と緑の豊かな関係が育まれる。



子どもたちを里山に連れていききっかけづくりとして、定期的に生物多様性教育を行っている



レイズドベッドでは、さまざまなハーブが育てられている



緩やかに蛇行する水辺には昆虫もたくさんやってくる

レイズドベッド横の芝は現在養生中



取材に訪れたのは6月初旬、アジサイが咲き誇っていた



ピオトープには、「芝生の根が育つまで踏まないで優しく見守って下さい」の注意書きが記されている



授業の一環で訪れていた近隣小学校の児童

一般社団法人市駅グリーンプロジェクト

和歌山市駅前ストリートガーデン
「しえきのにわ」

和歌山県和歌山市



歩道からアクセスしやすいように、芝生やウッドデッキと通行空間との境には、柵などの仕切りは設けなかった

産官学連携による駅前通りの再生

市駅周辺地区の商店街、自治体、和歌山大学観光学部永瀬研究室を中心に和歌山市駅周辺地区でまちづくりワークショップや社会実験などに取り組んできた市駅まちづくり実行会議は、和歌山市駅ビルと駅前広場がリニューアルされるなかで、2018年に一般社団法人市駅グリーンプロジェクトを設立した。歴史文化、水と緑、公共空間、生業・生活などの地域資源を活かしながら、「憩い」と「賑わい」に満ちた人と環境にやさしいまちづくりを目指す。市駅前通りや紀の川河川敷などの公共空間の利活用を促す社会実験、駅前広場の賑わい創出イベント、和歌山市の子育て支援拠点施設の委託運営などにも取り組む。

駅前通りは、商店街の機能が弱まってきている状況を踏まえ、まちづくり実行会議は、2015～2017年に車道の一部を歩行者天国化し、天然芝を敷き詰めたピクニック広場を創出。今回の助成により、天然芝とウッドデッキを中心に、レモンやみかんなどの果樹、色とりどりの花壇を配置したストリートガーデンを設け、若者や市民が緑地の育成やイベントなどに多面的に参加できるよう取り組んでいる。

「ストリートガーデンができたおかげで、10代・20代の若者がずいぶん来るようになりました」と市駅グリーンプロジェクト理事長谷澤博司さんは嬉しそうに話す。まちと緑、まちと人を結びつけるピクニック広場やストリートガーデンが、地域コミュニティの交流をよりいっそう促進することを期待する。



若者に人気の飲食店もストリートガーデンの維持管理に協力している



将来は駅前通りをコミュニティ道路化し、緑地と歩行者空間を広げることを目指している



ストリートガーデンの活用について盛り上がる市駅グリーンプロジェクトの皆さん



既存の植樹帯もストリートガーデンと一体となった花壇として積極的に活用



街路の歩道上に設置されたウッドデッキと天然芝

芝生を取り囲む花壇ではチューリップが咲き誇っていた



出店スペースも設けられ、イベントでも活用されている



特定非営利活動法人りくカフェ

りくカフェガーデンを核とした「未来コミュニティ」の醸成

岩手県陸前高田市



陸前高田市の高台にあるりくカフェ。「ガーデンまつり」には地域の人々がたくさん集まった

コロナ禍で途絶えた交流を再生

東日本大震災により、甚大な被害を受けた陸前高田市。何も無くなってしまったまちで「ほっと一息つける場所が欲しい」という地域の人々の声を受け、住民主体のプロジェクトとして、2012年に仮設カフェ、2014年に本設カフェを開業した「りくカフェ」は、屋外に設けられたコミュニティガーデンと共に、地域の人々だけでなく、市外から訪れる人々の憩いの場、交流の場として根付いてきた。それが2020年の新型コロナウイルス感染症蔓延に伴いカフェが休業。訪れる人が減ったことでガーデンの手入れも追いつかなくなり、かつての活気ある雰囲気が薄れていた。

そこで本設カフェ開業10周年を迎える2024年、コ

ロナ禍も落ち着いてきたことから、誰もが訪れ、季節の彩りを楽しみながら交流を育むことができるコミュニティガーデンの再生を構想。当助成事業の受賞を得て、2025年4月に地域住民へのお披露目を兼ねた植栽イベント「ガーデンまつり」が開催された。植栽された花苗は、ハーブ類を始め比較的メンテナンスが容易な宿根草など。この日は、千葉大学の秋田典子教授ら初期ガーデン設営にも携わった専門家の方々が、地域の人々と一緒に、新しいガーデンづくりに参加した。

NPO法人りくカフェ代表理事の鶴浦章さんは「地域の人が気軽に訪れて花を見たり、手入れをしたり。ときにはワークショップを開催してハーブ料理を勉強したりと、ガーデンを通じて豊かなコミュニティが醸成されることを期待しています」と笑顔で語った。



みんなでいっせいに植栽をスタート



「穴はこれくらい掘ればいいのか?」「見たことのない花の苗だわ」と、皆さん楽しげにおしゃべり



宿根草を中心に、さまざまな花の苗を混植。開花時期の違いなどにより、年間を通じて彩りが感じられるガーデンになることが期待できる

トレリスのなかには、岩手県産品種のクレマチス「こののは」を植栽



2014年に開業した本設のりくカフェ。この奥にコミュニティガーデンが設営されている

コミュニティガーデン再生に向けて尽力した、特定非営利活動法人りくカフェのスタッフと、初期のガーデン設営にも携わった専門家の皆さん



たぶのきネットワーク石巻

未来へのかけ橋—^{いのち}生命かがやく学校林—

宮城県石巻市



学校林内に設置された椅子とテーブルでくつろぐたぶのきネットワーク石巻の皆さん



学校林内の樹木の剪定や整備は、たぶのきネットワーク石巻のメンバーが行う



剪定した枝で昆虫の宿をつくるなど動植物の保護、生育に力を入れている



学校林誕生の経緯と目的が記されたパネル



学校林で拾った栗。稲井小学校の児童たちも参加して焼栗に

実りの里山を学校林に再生する

「たぶのきネットワーク石巻」は東日本大震災直後、石巻市内の中学校卒業者で首都圏に在住の同期生らで発足したグループが母体である。「芸術の力で〈子供に笑顔を！〉」と掲げた活動に、5年後「自然の力」を加え、地元賛同者と共に、被災地支援を行ってきた。

石巻市は、20年前稲井小学校校舎の向かいにある山林を実りの里山として整備。稲井小・中学校の児童・生徒たちの協力のもと、主に食べられる果樹を中心に、さらにオオムラサキの生息を願い1000本の植樹を行った。ところが、その後実りの里山は長い間放置されていた。その状況を知り、たぶのきネットワークのメンバーが学校林として再整備し活用しようと思立った。

学校林は稲井小学校の向かいにありながら林道を迂回しなければならず、遠回りせざるを得なかった。そこで、学校林の斜面に階段と手すり（ロープ）を設置、学校林に直接登れる近道を造成した。また、オオムラサキの保護観察を継承するため、植栽を整備し、他のチョウの食草となる柑橘類やタブノキを植樹した。剪定した枝で昆虫類の居場所をつくり、植生を観察し、カタクリ、キツネノカミソリ、キンランなどの在来植物を保護育成するための整備なども行った。

「今日は、子どもたちと焼き栗をつくりました」と話してくれたのは、たぶのきネットワーク石巻代表の長谷川郁子さん。今後は、学校林で採れた果実を味わう親子参加のイベントを開催すると長谷川さんは抱負を語る。学校林の保存継承が、次世代へ夢を紡ぐのだ。

社会福祉法人三篠会 それいゆ保育園

まもろう! それいゆの自然!
育てよう! 麻生のわ

神奈川県川崎市



樹木類は、花卉の色や香りの良いものを基準に選定した



今年新たにマンサクとイロハモミジを植樹した



ウメドキとスモークツリーも新たに植樹された樹木



開設10周年記念樹のシラカバ。後ろの建物はCAMPキッズ



CAMPキッズ前広場は水はけが悪く、日当たりもよくない。そのため芝は敷かず低木やグランドカバーなどを植えた

子どもたちの五感を豊かにしてくれる庭

社会福祉法人^{みきさかい}三篠会 それいゆ保育園は、重症児・者福祉医療施設ソレイユ川崎の事業所内保育所として従業員のおよび地域に暮らす子ども、また医療的ケア児も利用可能な認可保育所だ。

それいゆ保育園は、保育事業と共にさまざまな地域支援事業を行ってきた。ところがコロナ禍以降、それらの事業ができなくなってしまった。そこで、コロナが収まった今年（2025年）、それいゆ保育園では開設10周年を記念して、記念植樹を計画、同時に敷地内の緑化を行い、地域支援事業として位置付けた。

3月8日それいゆ保育園の在園児、地域の小学生（卒園児）、大学生および大学院生のボランティア、造園業

者、保育園の職員など総勢約135名が園庭に集まった。記念樹と樹木の選定にあたっては、田園調布学園大学の仙田考准教授の助言を参考にした。ナンテン、イロハモミジ、マンサク、ロウバイ、レンギョウなどが、「実がなる」「はっぱの形がおもしろい」「良いにおいがする」「紅葉する」などを基準に選ばれた。記念樹は、シラカバ。春は緑が芽吹き、夏は建物の日を遮り、秋は落ち葉拾いを楽しみ、冬は日光が入る。そんな四季を楽しめるように選定された。

「土の掘り返しや庭園整備はみんなでやりました」とそれいゆ保育園園長の近藤啓太さんは嬉しそうに話してくれた。園内に多種多様な樹木があることで、子どもたちの五感は豊かになり、太陽のように光り輝くことを期待する。

坂井市国際交流協会

外国人と作るベジガーデン

福井県坂井市



「ワールドガーデン」とも呼ばれる「ベジガーデン」には、さまざまな野菜や果物が育っている



5月に植えた野菜、8月にはこんなに大きく育った。なかには、大きくなりすぎた(?)ズッキーニも



ベジガーデン入口付近。バラのアーチがお出迎え



野菜だけでなく草花も一緒に植える「ベジガーデン」



自慢の一品を掲げて記念撮影。坂井市国際交流協会のベジガーデン収穫祭

野菜と花も一緒に育てるベジガーデン

「ナスにオクラにズッキーニ、パクチーやヒヨコマメもつくっていて、ワールドワイドでしょ」と言いながら誇らしげに畑を紹介してくれたのは坂井市国際交流協会(SIS)会員の木川直美さんだ。

今年(2025年)もSISファームでベジガーデン収穫祭が開催された。4、5月に植えた野菜が大きく育ち、8月にみんなで集まり、いっせいに収穫作業を楽しんだ。SISの特徴はそのメンバー構成にある。日本人に混じって、中国、ブラジル、インド、フィリピン出身の人々が一緒になって畑を耕し、野菜づくりに励んでいる。

SISファームは、「ワールドガーデン」という呼称があるように、80m²の畑にはさまざまな種類の野菜に加え、

草花も一緒に植えられており、いわゆる「ベジガーデン」形態で運営されている。そもそも日本で食べられる野菜の9割以上は外来種といわれているが、なかでもここで採れる野菜には、エスニック料理の素材として重宝されるパクチーやヒヨコマメがあり、外国人にはひとときわ人気が高いそうだ。

一般的に野菜の花を見る機会は少ない。たとえばオクラはハイビスカスに似た黄色の美しい花を咲かせるが、それを見たことがある人は多くはないはずだ。SISファームのすぐ隣にはショッピングセンターがあり、毎日大勢の買い物客で賑わうが、訪れた人々は隣接するファームの野菜の花や、野菜が成長していく様子を観察することもできる。ベジガーデンは、多文化共生社会の実現を目指す開かれた畑だ。

岐阜県立国際園芸アカデミー

緑が輪(縁側)になる庭

岐阜県可児市



施工までやってこそ庭づくり。カリキュラムも実習に重きを置いている



四季折々の花を学生が実習で植え替えている



庭園のアクセントとなるベンチとウッドデッキ。来園者の休憩スポットになっている



今回リニューアル工事を行った花トピア玄関前の庭園。2015年に開催された「花フェスタ2015ぎふ」の際に学生が施工した



花トピア室内から、花壇エリアを望む。ここもサテライトキャンパスの一部

花トピア玄関前の庭園をリニューアル

岐阜県立国際園芸アカデミー(以下、アカデミー)は、花と緑を扱う園芸のプロを育成する専門学校だ。「現場に直結した教育」を行える学校として、花きの生産、装飾、造園緑化の各分野について知識と実践技術の習得を目指す。

アカデミーは、岐阜県可児市にキャンパスをもつが、約6000品種のバラ園で有名な「ぎふワールド・ローズガーデン」内にサテライトキャンパスがある。2015年に開催されたイベント「花フェスタ2015ぎふ」においてぎふワールド・ローズガーデンの展示施設「花トピア」の玄関前に庭園をつくったのがきっかけで、庭園管理を継続して行ってきた。ただ植栽が繁茂し建物内外の視

界を遮断するため、玄関前の庭園を再整備することになり、花トピアもリニューアル工事を実施。花と緑に関心のある県民の活動拠点となるスペースを新たにつくると共に、アカデミーは花トピア内に実践教育フィールドを目的とするサテライトキャンパスを新設した。来訪者が集まってお茶を飲んだり話をしたり、子どもが遊んだり、そんな縁側のような庭園になることを願いながら計画しているという。

「デザインしておしまいでなく、実際の施工までやってこそ庭づくりということをうちの学生はみんな知っているの、進んで手を動かしています」と言うのはアカデミーの造園緑化コース准教授の新井俊宏さん。花とみどりの拠点となり、活動の幅をますます広げていくことを期待したい。

社会福祉法人光陽会 認定こども園光陽会しんひのおだい

開け、緑の玄関!

大阪府堺市



公園遊歩道に接する斜面地には丸太階段を設置した



植木の根元には草花が植えられている



自然芝なので園児たちは裸足で自由に遊び回れる



斜面地につくられた花壇



公園遊歩道と行き来ができるように開閉式の柵が設けられた



隣の新檜尾公園と自由に往来できるようになった

自然芝の敷かれた往来自由な自然空間

社会福祉法人光陽会 認定こども園光陽会しんひのおだいは、幼稚園と保育所の機能を併せもつ幼保連携型認定こども園だ。就労している家庭の子どもを中心に、文部科学省で定められた内容に沿って、公園遊びや体操教室、英会話を取り入れ、子どもたちの心身の健やかな成長を促す活動を行っている。

今回の緑化プランのポイントは、隣接する新檜尾公園との一体化を図ることだ。施設の公園側には、当園設立以来2重フェンスが設置されていた。そのため、子どもたちが園外で活動をしようとする、柵があることで車道へ出ざるを得ず安全性が保たれない、さらには、柵が視界を遮り公園の景観が楽しめないといった不満

もあった。そこで、フェンスを撤去することが解決につながったが、なにより子どもたちの心に変化をもたらしたことが大きかった。子どもたちの園活動の中心に「自然環境」という概念が取り込まれたからだ。たとえば、斜面地につくられた丸太階段の傍にはさまざまな花が植えられた。子どもたちは、そこに咲き誇る花々からうつろいゆく季節を感じ取るだろうし、園庭に敷き詰められた自然芝を裸足で走り回れば、生命の営みを感じ取れることもできるだろう。

「自然芝にして本当に良かったと思います。自然を直接肌で感じられるんですから」と子どもたちを見ながら、しんひのおだい園長の内田雄介さんは話す。

自然を身近に感じることの意味。それは自分自身が自然そのものだと気づくことに違いない。

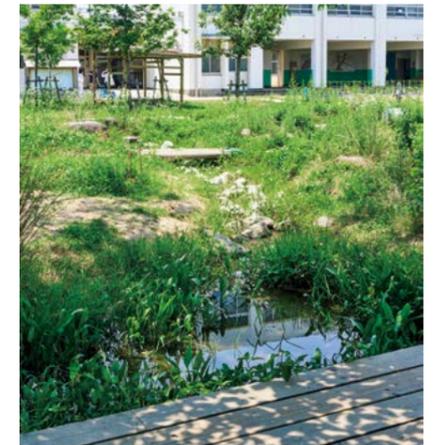
大阪市立瓜破西小学校

アトリパークでESD ～みんなが笑顔のコミュニティ～

大阪府大阪市



間伐材を活用し、蛇行するボードウォークを整備した「アトリパーク」。奥の木陰にビオトープが設けられている



水の循環用ポンプを導入、水路も造成し水辺環境を向上させたビオトープ



屋根をかけた東屋で、ラジオ体操に訪れた地域のひと々と交流するアトリくん



除草した草や落ち葉、アトリまめ(子どもたちによるフンの呼称)を混ぜて堆肥化するためのコンポスト



アトリパークの完成を契機に始まった、地域のひと々のラジオ体操

サステナビリティを学ぶ緑地

毎週金曜日の朝10時半、小学校の一角で、地域のひと々に児童らも混じり、ラジオ体操が始まった。傍らにある草地では、雄ヤギ「アトリくん」がのんびり草を喰む。その光景は、大阪市立瓜破西小学校の日常だ。

9年ほど前、瓜破西小学校では校舎の北側に隣接し、隣の校区との境界線上にあった約4500㎡の広場を学校の敷地として正式に使用できることとなった。同校ではここを自然学習の場として活用することを計画。ビオトープや畑を整備するも、あっという間に雑草が生い茂る。アトリくんはその除草役に加え、動物介在教育の教材としてやってきた。「アトリパーク」と名付けられた緑地は、学習面ではESD^{*}の実践の場にすると共に、

※ESD=Education for Sustainable Development(持続可能な開発のための教育)

地域交流の場として一部開放、近隣住民とのラジオ体操、未就学児や特別養護施設からの来訪なども受け入れ、多様な人々との交流が育まれるようになった。

そこで今回、森林ESDの学習を通して国産材の未活用が課題であることを学んだ6年生を中心に、アトリパーク内に間伐材を利用したボードウォーク整備と東屋への屋根掛けが行われた。またビオトープ周辺の環境を向上させるため水循環用のポンプなども導入。ビオトープへと続くボードウォークは車イスでの通行もスムーズで、アトリパークの役割として掲げる「教育×福祉の融合」というテーマを具現化した。さらに今後は、ヤギのフン、落ち葉や草などをコンポストに集めて堆肥化し野菜栽培に活用、循環型の飼育栽培活動も展開するなど、いっそう多彩な取り組みが計画されている。

特定非営利活動法人西日本環境ネットワーク

自然と共存・緑で地域がつながる「ころりん広場」

福岡県糸島市



花壇やプランターで季節の花々や野菜が育つ



7月に開催された「ころりんあそラボ」。マーケットも出店し、賑わいをみせる

誰もが気軽に訪れ、思い思いに過ごすことができる緑の空間として整備された「ころりん広場」



落ち葉を混ぜて土壌改良をしたところ、植物の育ちがよくなったそうだ



植栽時には参加者を募り、地域の人々と一緒に植え付けを行った (photo提供:特定非営利活動法人西日本環境ネットワーク)

カラフルな個性が集まる広場

2000年の設立以来、環境保全や農地保全を通じてコミュニティを育み、多様な人々が豊かな暮らしを営めるようなまちづくり活動を各種展開してきた特定非営利活動法人西日本環境ネットワーク。この度、その活動拠点として、人々が集い、安心して過ごせる緑地「ころりん広場」を開設した。糸島市の小・中学校と、糸島農業高校にも隣接するエリアに新しく造成された住宅地の一角には彩り鮮やかな季節の草花やブルーベリーなどが植えられた花壇、夏野菜やサツマイモなどが育つ畑エリアなども仕立てられ、明るく楽しい雰囲気が満ちている。広場の名称である「ころりん」は「Color-in」を和読みした造語で、色々な色の個性や特徴が集う場を

表しているという。

「モチノキの下に積み上げたブロックはベンチにもなり、木が育てば木陰のくつろぎ空間になると思います」と笑顔を見せるのは同法人理事長の文川愛さんだ。

訪れたこの日は、2025年4月の広場完成以降、毎月1回開催している「ころりんあそラボ」と称するイベント日で、飲食店、雑貨店などのマーケットが出店した他、子どもたちの遊び場として開放され、多くの人が集まり賑わっていた。ころりん広場ではこの他にも、「わかものカタリバ」や「こどもひろば」など、子育て支援につながる活動なども随時開催されている。

緑豊かな屋外空間に新たな拠点が誕生したことで、文川さんらが目指す豊かな地域づくりは、ますます充実したものになっているようだ。

社会福祉法人ゆりかご会 認定こども園みどり保育園

緑と水と生命 ~みんなで共生する環境を~

宮崎県北諸県郡三股町



遊びながら環境学習ができる場として整備された第2園庭



築山にビオトープ、起伏ある土地をグランドカバーのクラピアが覆う緑の園庭



みんなでビオトープを覗き込んで生き物を観察。「子どもたちは小さなメダカの赤ちゃんをいち早く見つける。その観察力には驚かされます」と園長の平川さん



園庭の外側、通りに面して受賞プレートを掲げたことで、地域の人がより興味をもって声をかけてくれるという

遊びながら自然を学ぶ緑の園庭

既存の園庭に隣接する未活用だった敷地を第2園庭として、築山やビオトープを造成、グランドカバーには可憐なピンクの花をつけるクラピアを敷き詰めて、起伏ある緑豊かな空間を構成した認定こども園みどり保育園。井戸水を利用したビオトープにはメダカ、ヌマエビ、ドジョウを放流。水辺には、ショウブやシラサギカヤツリ、セキショウなどの湿性植物を植栽、オモダカ、ホテイアオイなどの水草も植えて環境が整うと、トンボやチョウがたくさん訪れ、いつしかツチガエルも棲みつくようになった。

「既存の園庭は平らなグラウンドなので、こちらには起伏のある築山や、生き物がたくさん訪れるビオト

ープをつくり、子どもたちが自然のなかで遊びながら環境学習ができる場とすることを意識しました」と言うのは園長の平川達郎さん。第2園庭は地域の人が通行する道路に面しており、新しく誕生した緑の空間に関心をもちて声を掛けてくれる人が増えたという。

8月の晴天の日、子どもたちはプールの時間に第2園庭にも訪れ、足元の緑を裸足で気持ちよさそうに踏み、ビオトープを覗きこんでは「カエル見つけた!」と楽しげな声を上げていた。井戸水を利用したビオトープの水温は年間を通して約21度に保たれ、特別な手入れを施さなくても自然循環で安定した環境が維持されているそうだ。今後は、子育て支援事業の一環として地域の人々にも開放し、多くの人に「緑と水と生命」の豊かさを感じてもらいたいと考えている。

[緑の環境プラン大賞概要]

募集の対象

シンボル・ガーデン部門	全国の民間・公共の各種団体	緑のもつ環境保全機能（ヒートアイランド緩和効果・生物多様性保全効果など）を積極的に取り入れることにより、人と自然が共生する都市環境の形成やコミュニティの活性化に寄与するアイデアを盛り込んだ地域のシンボリックな緑地プランを募集します。
ポケット・ガーデン部門	全国の民間・公共の各種団体	日常的な花や緑の活動およびクールスポットの創出を通して、地域交流やコミュニティの活性化・子どもの遊び場づくり、保育園・幼稚園、学校、福祉施設などでの情操教育や身近な環境の改善などの各種アイデアを盛り込んだプランを募集します。

表彰

	国土交通大臣賞	1点	
シンボル・ガーデン部門	都市緑化機構賞	1点	副賞1,000万円以内（工事に対する助成金）
	第一生命賞	1点	
	国土交通大臣賞	1点	
ポケット・ガーデン部門	第一生命財団賞	1点	副賞150万円以内（工事に対する助成金）
	コミュニティ大賞	8点	

審査委員

委員長	進士 五十八	東京農業大学名誉教授・元学長／福井県立大学名誉教授・前学長
委員	坂井 文	東京都市大学副学長・都市生活学部教授
	佐々木 美恵	産経新聞取締役営業統括、東京メディアビジネス局長
	隅野 俊亮	第一生命保険株式会社代表取締役社長
	中田 裕人	国土交通省都市局長
	永山 妙子	マネジメントコンサルタント
	三上 真史	園芸デザイナー／1級FP技能士／タレント
	村上 暁信	筑波大学システム情報系教授
	北奥 郁代	一般財団法人第一生命財団常務理事
	棚野 良明	公益財団法人都市緑化機構専務理事

※2025年9月時点

主催等

主催	公益財団法人都市緑化機構、一般財団法人第一生命財団
後援	国土交通省、環境省、全国知事会、全国市長会、全国町村会、第一生命保険株式会社
協力	一般社団法人建設広報協会、一般社団法人日本公園緑地協会、一般社団法人日本造園建設業協会、都市緑化基金等連絡協議会、株式会社産業経済新聞社

●各部門の応募対象、応募条件など、詳しい応募要項は下記ホームページ、または二次元バーコードよりご確認ください。

URL <https://urbangreen.or.jp/grant/3hyosho/green-plan>



表紙 自然と共存・緑で地域がつながる
「ころりん広場」
(関連記事: p.18)

裏表紙 緑と水と生命
～みんなで共生する環境を～
(関連記事: p.19)

photo: 坂本政十賜

Green Story

2026年3月19日発行

発行者 一般財団法人 第一生命財団
東京都千代田区平河町1丁目2番10号平河町第一ビル2階
電話03-3239-2312

編集協力 株式会社 アルシーヴ社
佐藤 真
斎藤夕子

撮影 坂本政十賜

デザイン・レイアウト 河合千明

印刷 株式会社 サンニチ印刷

